

臨床微生物検査ハンドブック 第4版

編集 小栗 豊子

臨床微生物検査の良書

AMG 上尾中央総合病院臨床検査科科长/感染制御室室長

熊 坂 一 成

小栗豊子博士(亀田総合病院臨床検査部技術顧問)編集の「臨床微生物検査ハンドブック 第4版」が三輪書店から出版された。

本書には、臨床微生物検査の基本的な重要事項から最新の知見までが含まれている。そのすべてを紹介することはできないが、巻頭のカラーアトラスでは、喀痰の Miller & Jones の分類、Geckler の分類、主な検体のグラム染色標本、各種分離培地上の集落と確認培地、さらに微量液体希釈法と E テスト、迅速診断キットまでが網羅されている。本文では、基本的事項である患者検体の採取法と保存、グラム染色の鏡検や集落性状から菌種を推定することの重要性が強調されており、標準的な同定法と薬剤感受性検査が掲載されている。同定キットの使用ミスの解説の部分は是非、読者の方に熟読していただきたい。読者が実際に検査をする際の利便性を考え、臨床材料から検出される主な菌種の感染部位、日常検出される細菌の学名(新旧の学名)、由来材料を表にまとめている。

医療関連感染に関する内容も充実しており、バイオセーフティ、パルスフィールドゲル電気泳動法(PFGE)、PCR 法による耐性遺伝子の検出では CA-MRSA と HA-MRSA の識別に用いられる SCCmec の解説がされている。最近、話題の KPC、NDM-1 や、近い将来、日常検査への導入が予想される質量分析による同定法、薬剤感受性検査法では CLSI の最新ドキュメントの M100-S21、2011 の紹介がされている。このように良い本であるがいくつか気になった点もある。例えば、嫌気性菌の検査法で、菌名 *Eggerthella lentum* を採用しているが旧名 *Eubacterium lentum* の記載がない。すでに菌名変更から10年以上経過していても、医師が使用する図書の大部分は旧名のままであるので、他の菌と同様に考慮していただきたい。CLSI ディスク拡散法では CLSI 文書 M2-A4、2000 の記載があるが、この

ドキュメントは NCCLS の発行である。抗菌薬感受性のブレイクポイントの日米比較では日本化学療法学雑誌の巻とページの記載があるが、CLSI のどのドキュメントを使用しているか不明である。多くの参考文献が紹介されているが、ASM の Manual of Clinical Microbiology のように本文中に引用箇所を明示していただきたい。「カリキュラムのセクションと GIO」は従来の専門書にはない試みとして注目したいが、多くの読者にとって GIO の重要性は理解しにくいであろう。一つの GIO にせいぜい10個前後の SBOs であることが实际的であり、もし SBOs が20を超えるような場合は新しい GIO を別に設定したほうがよい。最近の医学教育は「GIO と SBOs」重視から「アウトカム基盤型教育」に移行しつつある。すなわち社会から「どのような医師が求められているのか」が最初に問われるべきなのである。その意味で、著者らが深く関与している「認定臨床微生物検査技師制度指定カリキュラム」に掲げられている「この新しい制度により養成されるべき、望ましい臨床検査技師像」を次回改訂の際には紹介されたらどうであろうか。

以上、瑣末な問題点を挙げたが、本書は臨床微生物検査の良書であることに間違はない。さらに改訂を重ね名著に育てていただきたい期待を込めて多少、厳しい書評になった。

この本には故 小酒井望先生が開設された順天堂医院臨床検査部の正統な歴史が引き継がれている。裏表紙の小酒井先生が撮影された大輪の菊の花の写真から恩師に対する小栗博士のいつまでも変らぬ敬愛の情が伝わってくる。

●A4 頁400 2011年
定価5,250円
(本体5,000円+税5%)
[ISBN978-4-89590-390-5]
三輪書店刊